Vol.2009-DD-71 No.2
2009/6/5

外国人のための観光ドキュメント
ー観光ガイドブックに着目してー

古屋秀樹[†]　野瀬元子[††]

日本における外国人観光客の動向，観光行動における情報提供媒体やそれらの分析事例を俯瞰しながら，明治期から現代までの，外国人向けの観光ガイドブックについての内容の変化，日本人向けのガイドブックとの比較を行う．
具体的には，ガイドブックの記述，分量をはじめとするコンテンツの差違が，①観光者の文化的背景，興味によるもの，②時代的背景によるもの，以上によって発現すると仮定し，観光ガイドブックの内容・構成，明治初期の英語観光ガイドブックの記述変化，同一著者による日本語・英語ガイドブックのコンテンツ比較，以上の３点について分析を行った．

Documents on Tourism for Foreigners
- Focusing on Guidebooks for Tourists -

Hideki Furuya[†] and Motoko No-se[††]

Focusing on the tourist guidebooks which have been used as one of the main sources of the tourist information since the beginning of the modern tourism in Japan, we analyzed the following three points: 1. the contents and the composition of the guidebooks, 2. descriptions of the guidebooks in the late 19th century to early 20th century (Meiji and Taisho era), 3. the contents of the guidebooks published in Japanese and English language by the same editors.
The analysis identified 1. the differences in the visibility of the culture in which the tourist objects lie and the influences of social change through the transition from 19th century to 21st century, 2. the changes in the descriptions through the development of the transport environment and by the local characteristics during the said period, 3. the similarity in the detailed descriptions between the two English-language guidebooks about Japan edited by foreigners and by Japanese, and the differences in the editing policy between Japanese-language version and English language one edited by the same editor.
In summary, the characteristics of the documents on tourism for foreigners were educed. The further analysis on the various types of guidebooks will provide the fertile ground for exploring their characteristics.

1. はじめに

国内・国外の観光地を調べる情報媒体として，インターネットや TV 等があるが，その中でも観光ガイドブックは容易に持ち運べたり，記入できるなど使いやすい媒体といえる．観光ガイドブックは，観光地と観光者とを結ぶものであり，執筆者・編集者は観光者・読者の文化的背景，興味などを考えながら，適当な情報を取捨選択して執筆・編集していると考えることができる．

時代をさかのぼって明治期を考えると旅行自体も十分大衆化，一般化しておらず，その中で観光ガイドブックはまだ見果てぬ地の情報を知ることのできる重要な手段であったといえる．一方，インターネットの普及をはじめ情報媒体の多様化がみられる現代においても，旅先での携帯性などによって観光ガイドブックは一定の役割を有していると考えられる．

そこで，本研究は，観光ガイドブックに着目し，観光行動における情報提供媒体やそれらの分析事例を俯瞰しながら，明治期から現代までの，外国人向けの観光ガイドブックの内容の変化，日本人向けのガイドブックとの比較を行う．

2. 観光の現状・観光情報の利用状況と既存研究

様々な形態がみられる「観光」行動であるが，「非日常空間において行う，自由時間における行動や体験」と定義できる[1]．本章では，観光ガイドブックの分析に先立って，まず日本における観光の現状を示すとともに，観光ガイドブックをはじめとする観光ドキュメントについての既存研究を紹介する．

2.1 観光の現状

現在における日本国民の観光行動をみると，先ず国内宿泊旅行（平成 19 年度）では，国内宿泊観光旅行参加率：52.2%，平均参加回数：1.19 回/人･年，平均旅行費用：40,600 円，平均宿泊数：1.59 泊となっており，経年で微増傾向を示している[2].

次に，国際観光についてみると，平成 20 年において日本人出国者数は約 1599 万人（前年比約 131 万人減），国民 1 人あたり 0.13 回/年（前年比 7.6%減）となっている．一方，外国人入国者数（再入国者を除く）は約 771 万人であり，世界的な景気後退などにより 0.1%の減少となった[3].

このような人数ベースに加え，国民の旅行消費額（平成 18 年度）は，26 兆 59 百億円（4 兆 74 百億円（国内日帰り旅行），15 兆 68 百億円（国内宿泊旅行），6 兆 17 百億円（国外旅行））となっている．訪日外国人の旅行消費額，1 兆 36 百億円を加えると，

† 東洋大学国際地域学部国際観光学科
Toyo University, Department of Tourism
†† 東洋大学大学院国際地域学研究科国際地域学専攻
Toyo Univ., Graduate School of Regional Development Studies, Doctoral Program in Regional Development Studies

ⓒ2009 Information Processing Society of Japan

国内での旅行消費額は 23 兆 54 百億円となり，これによる直接の雇用創出効果は 215 万人，旅行消費がもたらす生産波及効果（含む直接効果）は，52 兆 89 百億円（GDP の約 5.6%），442 万人（総就業者数の約 6.9%）の雇用創出効果があると推計されている[4].

個人個人の趣味嗜好で行われる観光行動であるが，それを積み上げた全体をみると経済的な影響も小さくないと考えられる．また，戦前であるが，大正期から昭和初期にかけて国際観光収入は，綿布，生糸，人絹に次ぐ外貨収入第 4 位に位置しており[5]，古今を問わず「観光」に対する人々の思い入れとそれらが顕在化した観光行動，その需要を支える経済システムの存在をうかがい知ることができる．

2.2 観光情報の利用状況について

観光行動は非日常空間で行われることも多く，そのため観光者は十分な情報を持ち得ない可能性もある．観光者は不完全情報によるリスクを小さくするため，そして何よりも充実した活動を安心，確実に行うために様々な媒体を用いて情報収集を行う．表 1 は，1 泊以上の国内宿泊旅行参加者（日本人）の情報入手媒体を示している．

表 1　国内旅行時における情報入手のための媒体別利用率（平成 15 年）[6]

		家族等の紹介（ﾛｺﾐ）	旅行業者のﾎﾟｽﾀｰ等	旅行雑誌，ｶﾞｲﾄﾞﾌﾞｯｸ	ｲﾝﾀｰﾈｯﾄ等の旅行情報	新聞・一般雑誌	公的観光案内所	テレビ，ラジオ	その他	わからない
都市規模	大都市（東京都区部）	42.6	27.9	20.6	25.0	20.6	2.9	5.9	5.9	－
	大都市（政令指定都市）	42.4	42.4	21.2	16.3	12.8	3.0	3.9	3.4	0.5
	中都市	46.5	37.4	22.4	16.1	16.8	6.3	4.2	4.7	0.9
	小都市	44.9	29.2	24.5	11.6	13.0	6.0	7.4	4.6	1.9
	町村	44.5	35.7	26.0	12.8	11.5	5.3	2.6	1.8	0.4
性別	男性	41.5	37.4	21.3	17.1	15.5	4.5	4.8	4.5	1.4
	女性	47.6	34.5	24.8	13.6	13.7	5.9	4.3	3.5	0.5
年齢	20～29歳	48.5	23.9	34.3	27.6	14.2	2.2	3.0	3.0	－
	30～39歳	35.6	26.3	27.3	27.3	10.8	3.1	6.7	3.6	0.5
	40～49歳	40.8	33.2	25.0	24.5	14.7	5.4	6.0	2.2	1.6
	50～59歳	44.0	47.3	23.5	9.9	18.9	6.2	3.7	2.9	－
	60～69歳	47.6	42.3	18.3	5.3	14.2	8.1	5.3	5.7	1.2
	70歳以上	56.0	32.6	12.8	0.7	12.8	4.3	1.4	6.4	2.1
職業	自営業主	46.3	38.0	14.9	9.1	13.2	5.8	5.0	5.0	1.7
	家族従業者	45.0	25.0	18.3	8.3	15.0	8.3	6.7	3.3	－
	管理･専門技術･事務職	36.6	36.0	27.1	24.5	14.3	3.5	5.7	3.8	1.3
	労務職	40.8	40.3	27.0	17.9	14.3	6.1	7.1	5.1	1.0
	主婦	53.7	34.5	22.0	11.8	15.0	5.6	3.1	2.8	0.3
	その他の無職	48.8	34.8	21.3	6.7	15.2	5.5	0.6	4.3	0.6
合計		44.8	35.8	23.2	15.1	14.5	5.3	4.6	3.9	0.9
平成11年８月調査		44.3	39.5	21.7	3.5	12.6	6.8	3.3	3.8	1.5
平成６年10月調査		50.6	37.6	15.2	－	13.3	4.9	4.3	5.0	2.3

※回答方式：複数回答可．赤：45%以上，黄：30%以上，緑:15%以上を示す．

表 1 より，多くの階層で「家族，友人，知人等の紹介」である「ロコミ」利用率が多いことがわかる．その理由として，「身近な人からの情報提供」ということに加え，趣味嗜好が似ている人から受け取る情報のために観光者が情報の精度や確からしさをあらためて調べる必要が小さいこと，口述のため情報理解が容易であることが考えられる．「ロコミ」に続き，「旅行業者のポスター，パンフレット，案内書等」，本分析で取り上げる「旅行雑誌，ガイドブック等」，「インターネット等の旅行情報」と続く．また，前回調査（平成 11 年）と比較するとインターネットの利用率が高くなっており，観光者のネット利用可能性，ネット上におけるコンテンツ整備に加え，自ら欲する情報を時間，空間制約が小さい中で能動的に取得できる媒体の特性が影響していると考えられる．

以上で示した情報媒体に加え，近年では「Yahoo ドライブ」をはじめとして，インターネット HP 上でドライブルートと写真を同時に表示する視認性の高いコンテンツの整備や，実験段階であるが GPS アンテナを設置したレンタカーが当該地域に到着した場合，観光スポットの情報を逐次送信するシステムの構築事例[7]もみられ，実行動における目的地・経路の変更などに大きな影響を与えると考えられる．

2.3 観光情報に関する既存研究

ロコミによる情報収集が多い中で，旅行雑誌・ガイドブックの利用も比較的多いことがわかった．これらに関連した研究として，どのような情報媒体を利用しているか，といった利用実態調査を行った文献は数多くみられるものの，その媒体を直接取り上げ，分析している事例は少ない．その中で，英語観光ガイドブックを分析対象として取り上げた里井他の研究がある[8]．この研究では，外国人によって著されたガイドブック，日本人個人によって著されたガイドブック，日本の公的機関出版によるガイドブック３冊を比較しながら，「旅行制度」，「移動手段」，「町の紹介」などあらかじめ設定した項目別に単語の出現頻度を分析，ガイドブック別の特徴を総括している．また，今野他[9]は，項目別単語出現頻度だけでなく，観光地域別出現頻度・記述行数の比較を行い，重点的に取り上げられた背景についても考察している．

一方，古屋他[10]は，「お土産話」を形態素解析によって分析し，形態素（品詞）による文章の構造から土産話を 4 つに分類できること，目的地・観光者個人属性によって評価が異なることを明らかにしている．また，ガイドブックのみを対象としていないが，仮想空間における「観光情報量」について分析した吉井の研究[11]があり，人との接触を規定する人口密度，イミテータ，イノベータといった観光情報への性向度合い，ロコミ量を規定する観光地の満足度の各要因が，人々の取得する情報量に影響することをマルチエージェントシミュレーションによって定量的に分析している．

以上のように，形態素解析などの適用もみられるが，観光ガイドブックを対象とした分析は，ヒューリスティックに行われている事例が多く散見される．

ⓒ2009 Information Processing Society of Japan

3. 観光ガイドブックのコンテンツ分析

3.1 分析における考え方

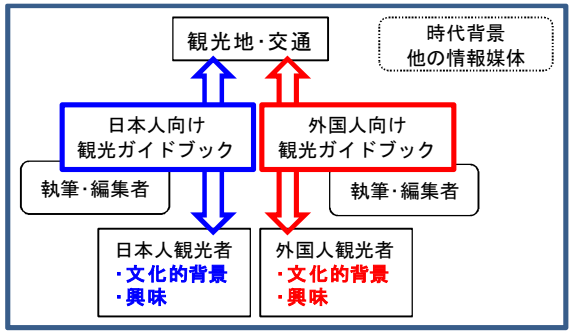

図 1　観光ガイドブック・コンテンツへの影響要因

観光ガイドブックは，観光資源，周遊ルート，宿泊先，食事処をはじめとして，地域の形成過程，文化などを紹介するとともに，主要都市からのアクセスなど観光地に関連した情報を提供している．図 1 に示すように，多種多様な情報から想定する読者層の文化的背景や興味にマッチするように取捨選択を行いながら，ガイドブックの執筆・編集を行っていると考えられる．この際，発行される時代の背景，他の情報媒体などの外部環境も密接に関連しながら，最終的に発刊されるといえる．

本章では，ガイドブックの記述，分量をはじめとするコンテンツの差違が，①観光者の文化的背景，興味によるもの，②時代的背景によるもの，以上によって発現すると仮定し，記述の違いを分析するとともに，その原因について考察する．以下では，観光ガイドブックの内容・構成（3.2 節），明治初期の英語観光ガイドブックの記述変化（3.3 節），同一著者による日本語・英語ガイドブックのコンテンツ比較（3.4 節）について述べる．

3.2 観光ガイドブックの内容・構成

小中学校をはじめとする歴史，地理科目の修学やさまざまな情報取得によって，日本人は，我が国の観光資源の概要やその地域の形成，宗教や生活様式等を認知・俯瞰することができ，文化的背景・素養を自然発生的に具備することができる．これらは実際の観光行動に際して，自動的に暗黙知・前提条件になることから，観光ガイドブックへのコンテンツ掲載も必要最小限となる．それに対して外国人は，これらの知識を十分持ち得ないため観光資源の理解が十分できない一方，それら自体が異文化・観光地としての魅力にもなりうる．そのため，日本を対象とした観光ガイドブックには歴史，地理等の文化的背景を補完するコンテンツが掲載されていると仮定し，その実態把握をおこなった．

取り上げる観光ガイドブックは，外国人が執筆したものの中から 1)明治初頭のものとして日本語にも翻訳された文献[12]，2)現在比較的多くの外国人利用がみられる文献[13]，以上 2 冊を，比較対象として 3)日本人用のフランス観光ガイドブック[14]を用いた．コンテンツの比較にあたっては，ガイドブックの章節を抽出するとともに，ページ単位の記述量を把握し，同一コンテンツの頁数，掲載割合を比較した．なお，記述量は執筆者やガイドブックの編集方針等による影響も考えられるが，読者である観光者の文化的背景・興味と整合性を持たせるための結果として紙面作成に至ったと仮定する．

表 2 は，取り上げた 3 冊のガイドブックについて，特定の観光地域，施設に関連した観光地情報と日本（もしくはフランス）全体に関連する一般情報それぞれの掲載割合について示したものである．

表 2　観光ガイドブック別観光地情報・一般情報の構成割合（%：比率，数値：頁数）

明治日本旅行案内[12]			EYEWITNESS TRAVEL, JAPAN[13]			JTBワールドガイド・フランス(2002)[14]		
観光地情報	83%	951	観光地情報	59%	232	観光地情報	81%	352
一般情報	17%	193	一般情報	41%	160	一般情報	19%	80
合計	100%	1144	合計	100%	392	合計	100%	432

文献[13]，[14]は，ほぼ同じページ数であり，携帯できるように A5 版変形の大きさであるのに対して，文献[12]は B6 版変形（バイブル版）である．表 2 より，1884（明治 17）年に発行された[12]は一般情報が 17%であるが，2007 年に発行された[14]は 41%と大幅に構成比率が増加している．また，日本人向けである文献[14]は一般情報が 19%であり，文献[13]と比較するとかなり少ないことがわかる．この差異が観光者や出版社，もしくは日本という対象国に依存するものであるのか，さらにはいずれの形態が好ましいかは判断できないが，少なくとも英語圏から来訪する観光者向けの観光ガイドブックには，日本の歴史・地理等の説明に多くのスペースが割かれており，外国人がこれらをもとに観光地を訪問していること，観光資源を視認，体験していることに留意する必要があり，これらは旅行ガイド（案内人）教育やインターネット・サイト整備に適切にビルトインしたり，日本人観光者の暗黙知との比較研究などへの適用が考えられる．

ここで，一般情報の構成比率では，文献[12]は[13]より小さかったが，総ページ数が異なるため，さらに記述内容を詳細にチェックする必要がある．表 3 は，観光ガイドブックのコンテンツ比較を示したものである．

ⓒ2009 Information Processing Society of Japan

Vol.2009-DD-71 No.2
2009/6/5

表 3　観光ガイドブック・一般情報のコンテンツ比較（%：比率，数値：頁数）

	明治日本旅行案内[12]			EYEWITNESS TRAVEL, JAPAN[13]			JTBワールドガイド･フランス(2002)[14]		
1	日本語―イタリア語の発音と類似	1%	1	Phrase Book	3%	4	フランス語会話	8%	6
2	遊歩規程―開港場から十里以内	1%	2						
3	内国旅券―旅行には許可が必要	1%	1						
4	地図と参考書―クニッピングの地図が最良	1%	2	Putting Japan on the Map	1%	2	フランス早わかり	3%	2
5	手荷物―柳行李が秀逸	1%	1						
6	服装―草鞋と綿脚絆の準備を	1%	2						
7	旅行心得－悪臭対策に石灰酸が必需	1%	1						
8	道路，乗物，料金など－増える人力車	1%	1	Travel Information	5%	8	フランス国内交通	13%	10
							日本からの入国と出国	3%	2
							近隣諸国からの入国と出国	5%	4
9	主要ルート一覧表－25コースを紹介	2%	4				フランスのおすすめルート	3%	2
							旅行計画のチェックポイント	3%	2
10	旅宿-床の間の前が特等席	1%	1	Where to Stay	13%	20	泊まる	5%	4
	日本の入浴と温泉－熱い湯に注意	1%	2	Onsen	1%	2			
11	狩猟免許―猟期は十月から四月まで		0						
12	通貨－一円紙幣が最も便利	1%	1				通貨と両替	3%	2
13	度量衡―一里は二・四四マイル	1%	1						
14	食糧など―入手が困難な牛肉と鶏	2%	3	Where to Eat	21%	34	食べる	5%	4
							地域別フランス食案内	13%	10
15	電信局全覧－全国で182局が開設	1%	2				電話と郵便	3%	2
16	地理－山岳部が優勢で火山が多い	4%	8	Japan thorough the Year	4%	6	時差／自然と気候	1%	1
	天候と気象－南北に大きく広がる	3%	6	Japanese Gardens	1%	2	フランス年間早見カレンダー	3%	2
				The Landscape of Japan	1%	2	祝日とイベント	3%	2
17	動物学－島国で演じられる動物相	17%	32						
18	植物学－ユリとシダに注目	9%	18						
19	神道－神道は宗教たり得るのか	10%	20	Shinto: the Native Religion	1%	2			
20	仏教－中国から伝来して隆盛に	20%	38	Buddhism in Japan	1%	2			
21	絵画美術－あたらしい絵画法の組み立ては可能	7%	13	A Portrait of Japan	4%	6			
	彫刻美術－世界に影響を及ぼすか	17%	33	Japanese Traditional Theater	1%	2			
				The History of Japan	8%	12	歴史と文化	5%	4
				Traditional Japanese Houses	1%	2			
				Japanese Traditional Dress	1%	2	民族	1%	1
				Japan's Festivals: Matsuri	1%	2			
				Sumo and the Martial Arts	1%	2			
				Traditional Arts and Crafts	1%	2			
22				Shopping in Japan	4%	6	買う	5%	4
							ユネスコ世界遺産	3%	2
23				Theme Parks	1%	2			
				Sports and Outdoor Activities	3%	4			
				Special Interests	4%	6			
				Modern Japan	1%	2			
24				Further Reading	2%	3	本と映像	3%	2
25				Discovering Japan	3%	4	フランス基礎知識	3%	2
26				Practical Information	11%	18	滞在実用情報	3%	2
							情報収集	3%	2
							旅のトラブル	4%	3
							病気・健康管理	1%	1
							便利電話帳	1%	1

表 3 において，構成比率 15%以上：ピンク，10%以上：橙，5%以上：水色で示しているが，日本人を対象とした文献[14]では，交通案内（表中，8）や食関係（14），言語関係（1）が多く，それに続いて購買・ショッピング（22），歴史・文化（21），宿泊関係（10）となっている．これより，外国における観光行動を効率的・効果的に行うためのコンテンツが多く，その国の文化的背景はあまり分量が割かれていない．

一方，明治期における外国人を対象とした文献[12]では，絵画･彫刻（21），仏教（20），植物学（17），仏教（19），動物学（18）が多いが，これは，日本の実態が十分認知されていない状況で，美術品，動植物に加え，仏教・神道といった日本の成立・発展過程と密接に関連し，日本人の思考，生き様への影響要因についての記述が多いといえる．また，ホテルの整備も十分ではなく，食料も持参しているため，これらの記述が少ないと考えられる．それに対して，文献[13]では，食関係（14），宿泊関係（10）の記述が多い．神道・仏教に対しての理解が進む一方，旅先での食や宿泊など，より旅行を充実させるために必要な情報に関する言及が多くなったと考えられる．

これらの違いは，対象とする観光者，出版する地域による「観光ガイドブック」という情報媒体自体の守備範囲，位置づけによる可能性もある．観光対象を有体に捉える日本語ガイドブックに対して，観光資源，対象国の背景までを含めて記述した教養書としての性質を併せ持つ英語ガイドブックと見ることができる．しかしながら，ここでは限定的な 3 冊のみの分析であるため，分析対象を追加したり，編集者へのヒアリングなどが課題としてある．

3.3　明治初期の英語ガイドブックの記述変化

3.3.1 明治期の外国人国内旅行の環境と日光・箱根の交通条件

1858（安政 5）年，日米修好通商条約において領事裁判権を米国側に認めたため，日本人と外国人との無用の衝突を避けるために，外交官以外の外国人には居留地から 10 里以上の旅行を認めなかった（内地旅行制限）[15]．その後，政府の御雇外国人，一般の雇入外国人，1874-75（M7-8）年には病気療養・学術研究にかぎり許可する制度が整備され「旅行免状」を発給するようになり，1899（M32）年の廃止まで旅行制限は続いた．その間も 1870 年代に隆盛した世界周遊旅行の波により，来日した外国人によって自国の観光行動である避暑・避寒，登山，ゴルフ，スキー等の多様な観光行動が紹介された．これらは，それまで日本になかったものであるが，外国人を模倣しながら日本の皇室，外務官僚，財界人がはじめに同様な行動を起こし，特に避暑・避寒に適した地域では，そのための環境整備が進んだ[16][17]．

このような中で，日光，箱根は日本における近代観光の黎明期より国際観光地として発展を遂げた．日光は，江戸時代からの二社一寺を中心にした「日光詣」が引き続き行われ，多くの来訪者でにぎわった．また，箱根は東海道関所としての要所であったこと，箱根湯本や芦之湯に泊まる「一夜湯治」などの温泉資源，富士山の景観，さらには横浜からの近接性から日本人，外国人いずれにとっても大きな誘引力を持って

ⓒ2009 Information Processing Society of Japan

いたと考えられる[18].

これらの地域では，観光に大きく影響を及ぼす交通環境の整備が急速に進み，これにより観光行動も変化し，観光ガイドブックにもそれらが徐々に反映された．表 4 は，両地域の交通環境の変化を示したものである．両地域における道路開削には 20 年超，鉄道敷設では高速度輸送の最寄駅までの直通線の開通は，日光が 10 年ほど早いという差異があり，自動車保有の大衆化が進まないこれら時代では，鉄道敷設が観光行動に大きな影響を与えたと考えられる．

表 4　日光・箱根における交通環境の変化（[19][20]に著者加筆）

年号	西暦	日光	箱根
明治6	1873	金谷ホテル開業	
明治11	1878		富士屋ホテル開業
明治17	1884	日光一円宮内省御猟場に指定	
明治18	1885	東京～宇都宮間に鉄道開通	
明治20	1887		横浜～国府津間に鉄道開通（東海道線は御殿場まわり）
〃	〃		湯本～宮ノ下に至る車道が民間の手により完成
明治21	1888	小倉山・野洲原及び奥日光が宮内省御料地となる	国府津～湯本間に鉄道馬車開通
明治22	1889	馬返～中禅寺間の山道に九十九折の新道を開拓	
明治23	1890	宇都宮～日光間の鉄道全面開通	
明治33	1900		国府津～湯本間，電化
明治37	1904		宮ノ下～箱根間の車道が完成
大正2	1913	日光駅～馬返間に日光電気軌道が全面開通	国府津～箱根間に貸切自動車の営業開始
大正6	1917	日光自動車㈱は日光～馬返間に乗合自動車開業	
大正8	1919		湯本～強羅間に登山鉄道が開通
〃	〃		横浜グランドホテル～宮ノ下富士屋ホテル間に乗合自動車運行
大正14	1925	馬返～中禅寺間の山道が拡幅され乗合自動車運行	
昭和2	1927		新宿～小田原間　開通（小田原急行鉄道）
昭和4	1929	東武鉄道日光線の浅草～日光間が全線開通	
昭和7	1932	馬返～明智平間に日光登山鉄道が開業	
昭和8	1933	明智平～中禅寺湖畔に自動車専用道路開通	
昭和11	1936		東海道　小田原，熱海を通り，三島へ抜ける路線が開通

※灰：鉄道整備関連，緑：道路・自動車関連，橙：登山鉄道関係

3.3.2 日光・箱根の記述変化

旅行免状が必要な中にあっても，外国人の観光需要は低下することなく，さらに旅行記，観光ガイドブックも出版される．代表的なものとして，下記のものがある．

①Edward S. Morse : Japan Day by Day，1877（エドワード・モース：日本その日その日，M20）

②I. L. Bird：Unbeaten Tracks in Japan，1885（イザベラ・バード：日本奥地紀行，M18）

③Eliza Ruhamah Scidmore：Jinrikisha Days in Japan，1891（スキッドモア：日本・人力車旅情，M24）

④Handbook for travellers in Central and Northern Japan, John Murray（マレー社）

①～③は旅行記であるが，④はイギリスのマレー社から第 1 版（1881（M14）年）より第 9 版（1913（T2）年）まで継続的に出版された数少ない観光ガイドブックである．初期の著者アーネスト・サトウは，英国通訳官・書記官であり，日本各地をまわった 64 ルートごとに，各地を紹介しており，これを取り上げた書評には，「本書を持たずに日本の国内旅行に向かうことはないであろう」と記されたこともある．そこで，本項では同一対象地の記述変化に着目するため，第 2 版（1884（M17）年）[21]，第 9 版（1913（T2）年）[22]を取り上げて，それぞれの観光地域についての概要部分を比較した（表 5）．

表 5　英語ガイドブックの記述比較（下線部，筆者記入）

	第 2 版（1884 年出版）	第 9 版（1913 年出版）
箱根	箱根は芦の湖畔に位置する魅惑的なところで，円錐状の富士の姿が美しく眺められる，温泉と舟遊びが楽しめ，蚊が少なく，唯一の欠点といえば湿度が少し高いことだ．	箱根へのルートは特にお薦めである．眺めが魅力的で，行きやすく，快適性に富んでいる．横浜に到着した旅行者は 1 週間とって箱根に行くのがよいだろう．どうしても日程が取れない場合は，2－3 日でも行くとよいだろう．
日光	日光は海抜 2000 フィートの地点にあるため暑熱の時期でも比較的涼しく，高度 4375 フィートの中禅寺も好ましいところだ．	日光は海抜 2000 フィートに位置するため夏の避暑に適したところである．そのため，たくさんの駐在外国人が日光あるいは中禅寺に別荘を持っている．

箱根について比較すると，第 2 版から第 9 版にかけて下線部に示すように，より読者に箱根の魅力を伝え，訪問を促す文章へと変化していた．避暑地として，ホテル等受け入れ施設の充実度，横浜からの近接性，ハイキングなど手軽な観光行動を行う場所へつながる地域内のモビリティが確保された点で，第 9 版では箱根をより推薦する記述になったと考えられる．

一方，日光をみると，第 9 版で「駐在外国人の別荘地である」という記述が加わっていた．これは，前項で確認したように，中禅寺湖畔（奥日光）へのアクセシビリティは決して万全なものではなかったものの，外交官や皇室など限られた上流階級の人々のサロン的な土地柄となり，箱根ほどの頻繁な乗客の輸送・移動を必要としない状況の下，駐在外国人の避暑地として発展したという事情が背景にあるといえる．

東海道線が御殿場周りとなった箱根と異なり，日光では主要交通軸の付け替えがおこらず相対的な地域競争力の地盤沈下が起きなかったこと，東照宮や二荒山神社など

ⓒ2009 Information Processing Society of Japan

の聖域が存在していたため，外部資本の流入が大きくならなかったと考えられる．逆にそれらにより，新政府ひいては外国外交官によるある種，ステータスをもった避暑地としての機能が大きくなったと考えられる．このように，日光と箱根は，保養地として発展する契機を外国人によって見出された歴史は共通し，訪日観光の訪問地として双方とも広く認知された歴史を持つが，日光が日本駐在の外国人の保養地として発展したのに対し，箱根は駐在外国人と来訪外国人の双方が訪れる保養地だったこと，その成立過程には，交通条件ならびに地域特性が大きく影響していたと考えられる．

3.4 同一著者による日本語・英語ガイドブックのコンテンツ比較

3.4.1 明治期から昭和初期における外客誘致機関の変遷

日本の外客誘致機関としてはじめて設立されたのは，東京商工会議所による喜賓会（The Welcome Society （1893（M26）-1914（T3））といわれ，そのねらいとして不平等条約の解消による商工業活動の維持・活性化があげられる[23]．ホテル，鉄道などの個人会員の会費，寄付金によって活動していたが，日露戦争後の鉄道国有化による会員の減少，対ロシアの不平等条約解消による目的達成，さらには鉄道院（1908-1920）による政策的関与強化によって，その活動はジャパン・ツーリスト・ビューロー（1912（T2）-1941（S16））に引き継がれる．これは鉄道院の技師であった木下淑夫氏が外客誘致機関設置を提言したことがはじまりとされ，鉄道院からの財政支援を受けた半官半民による組織であった[24]．さらに 1916（T5）5 年には，大隈重信内閣における経済調査会の決議により，外客による観光振興が指摘され，政府として観光への関与を大きくするため，1930（S5）年に鉄道省（1920-1943）に国際観光局が設置され，ホテル整備への財政支援，国立公園の観光への活用などがなされた．

この中で，鉄道院は 1914(T3)年頃，日本人ならびに外国人を対象とした 2 冊のガイドブックを発行する[25][26]．1914 年は折しも第 1 次世界大戦が開戦し，日本では戦争需要によって経済も好転した時勢であり，所得改善等により人々の観光需要も底堅いものがあったと推察できる．

例えば，文献[25]の例言には，下記のように記されている．（括弧箇所，筆者記入）

「一．*本書は鉄道に頼って旅行せられむとする大方に向って，其探勝遊覧の栞に供せむが為に発行したもので，主として鉄道院所管各線沿道の勝地を記述し，主なる名勝地には写真と地図とを挿入し，別に巻頭には索引を附し，巻末には回遊旅行の栞，鉄道系統表，沿線旅館一覧表，主要駅間乗客賃金表，鉄道院所管線路図等を添えて，旅行者に便せむことを期した．*

一．*索引はこれを都市名邑，神社，仏閣，名所舊蹟（きゅうせき），公園，避暑避寒地等に分類し，大體（だいたい）各線別に之を配列した．これは一面記事の索引ともなり，又一面には一見して各線主要の勝地を容易に知ることも出来るので，旅行者の遊覧計画の際の一助となるであろうと考えたのである．*」

このように鉄道を利用して旅行する人々が顕在化した中で，探勝遊覧に供するための適当な地域について情報提供していることがわかる．

一方，文献[26]は，外客誘致を通じた外貨獲得を目的として存在していたと考えられる．序文の最終段落には，下記のよう記されている．

「*Japan has for well-night half a century strongly attracted the attention of the world. The beauty of her natural scenery and of her artistic products (paintings, lacquer-ware, pottery, bronze works, etc.) has come to be universally admired. Her quaint and in many ways charming customs, her long history and the unique line of her Imperial House, her bushido, the patriotism and loyalty of her people, all these have become subjects of curious and interested inquiry all the world over.*

It is hoped that these volumes, by supplying useful, reliable, and up-to-date information on these and many other matters, will satisfy a long-felt want and prove to be a really useful guide to those numerous strangers who annually visit these island.」

このように景観や様々な工芸品，さらには文化・風習を含めたものを魅力として位置付け，これらを包括的にとらえながら外客誘致を念頭としていることがわかる．そこで，これら 2 冊のガイドブックを取り上げ，両者の記述の差違について考察した．

3.4.2 日本語・英語ガイドブックのコンテンツ比較

表 6 は各ガイドブックの構成を比較したものである．ページ数が大きく異なり，利用目的も大きく異なるが，文献[25]は鉄道利用を前提とした解説，文献[26]は日本の芸術につづいて，農業や養蚕，工芸品の貿易等の「工業」も大きく取り上げられている．

表 6　日本語・英語ガイドブックの構成比較

文献[25]　B6 変形版 372 頁	文献[26]　B6 変形版 1002 頁(556+446)
路線情報 283 頁(76%)	観光地情報 798 頁(80%)
一般情報 89 頁(24%)	一般情報 204 頁(20%)
①鉄道系統表(28 頁) ②沿線旅館一覧表(26) ③鉄道旅行案内(23) ④回遊旅行の栞(8) ⑤鉄道院所管線路名構表(3)	①Outline on History of Japanese Art (34 頁) ②Industries(23) ③Religions of Japan (17) ④Sketch of Japanese Literature (14) ⑤History(13)

表 7 は，文献[26]で取り上げられた全 49 ルートを示したものであるが，赤字は文献[25]で取り上げられなかったルート，紫字は路線ではなく，観光地域として取り上げられたルートを示している．頁数の多い順に，「28 Tokyo and Environs」，「18 Kyoto and Environs」，「44 Nikko」となり，都がおかれた歴史がないものの，日光の記述量が多く，東京からの近接性に加え，観光資源としての魅力などが評価されていたと考えられる．

ⓒ2009 Information Processing Society of Japan

Vol.2009-DD-71 No.2
2009/6/5

表 7　文献[26]で取り上げられた観光ルート

ルート	概要	頁数	比率
1	Shimonoseki and Moji	9	1%
2	Moji to Kagoshima	24	3%
3	The Ryukyu Islands	2	0%
4	Nagasaki Line (Tosu-Nagasaki)	4	1%
5	Nagasaki and Neighbourhood	16	2%
6	Excursions from Nagasaki to the Outlying Islands	4	1%
7	Hosyu Line (Kokura-Oita)	8	1%
8	San-in District-Western Section	2	0%
9	San-yo Line (Shimonoseki to Kobe)	18	2%
10	Shikoku	14	2%
11	Kobe and Environs	30	4%
12	The Inland Sea	7	1%
13	Kobe to Osaka	1	0%
14	Osaka and Environs	34	4%
15	Osaka to Shin-Maizuru, and Visit to Ama-no-hashidate	5	1%
16	Visit to Yoshino, Koya-san, and Waka-no-ura	8	1%
17	Osaka to Kyoto by Railway	2	0%
18	Kyoto and Environs	82	10%
19	San-in District-Eastern Section	18	2%
20	Nara Line (Kyoto to Nara)	6	1%
21	Nara and Vicinity	20	3%
22	Kwan-sai Main Line, E. of Nara	4	1%
23	Pilgrimage to the Ise Shrines	16	2%
24	Kyoto to Maibara	6	1%
25	Taiwan or Formosa	10	1%
26	Yokohama and Environs	18	2%
27	Yokohama to Tokyo	4	1%
28	Tokyo and Environs	95	12%
29	Kamakura	19	2%
30	Hakone and Neighbourhood	18	2%
31	Mt. Fuji and Neighbourhood	11	1%
32	Numazu, Shizuoka, etc. on the TokokaidoLine	16	2%
33	Nagoya and Neighbourhood	12	2%
34	Central Line (Manseibashi to Nagoya)	32	4%
35	Nagoya to Kameyama	2	0%
36	Gifu and Neighbourhood	8	1%
37	Hokuriku Line (Maibara to Naoetsu)	23	3%
38	Takasaki Line (Omiya to Takasaki)	8	1%
39	Shin-Etsu Line(Takasaki to Niigata)	22	3%
40	Sobu line (Ryogokubashi to Choshi)	10	1%
41	Joban Line (Nippori to Iwanuma)	14	2%
42	North-Eastern Line (Ueno to Aomori)	38	5%
43	Ryomo Line (Oyama to Takasaki)	6	1%
44	Nikko	40	5%
45	Gan-Etsu Line (Koriyama-Nozawa Section)	4	1%
46	O-u Line (Fukushima to Aomiri)	23	3%
47	Hokkaido	17	2%
48	Chishima, or the Kurile Islands	1	0%
49	Karafuto	7	1%
	合計	798	100%

次に，個別観光地についてどのような記述形態になっているのか，比較を行った．いずれも，対象地として「日光」を取り上げ，その記述内容を比較する．まず，日本人を対象とした文献[25]では，「日光線　宇都宮－日光」の概要（*本線は本邦有数の名勝地たる日光に至るの線で，上野日光間六回の直通列車あり，約四時間半を要する.*），および各駅の紹介が 2 行示されたのち，「日光附近」として以下のような説明文が約 5 頁にわたって記述されている．（括弧箇所，筆者記入）

「*日光の一区は本邦山水美の鐘まる所，峯岳あり，瀑布あり，湖水あり，渓流あり，叢原(そうげん)あり，温泉あり，之に加うるに殿堂楼閣の美あり，自然の秀麗，人口の精華，相俟って雙美（そうび）の盛名を独占している．人この山に遊ばざれば，口に結構を語ることはできないのである．宇都宮より日光線に入り例幣使街道の古杉鬱蒼たる間を走ること数里，文挟駅に至れば，一帯の山岳既に車窓の眺に入り，今市駅まで至れば，山容いよいよ明らかに，男体山の偉大なる姿，高く群峰の中に挺立するのが見ゆる．日光駅に下車して，坂道一路鉢石町を過ぐれば大谷川の急湍(きゅうたん)あり，左に神橋を望む．朱欄金珠，碧水に映じて綺麗繪（きれいえ）をみるようである．神橋の夕照（せきしょう）は日光八景の一に算えられ，日光の勝この一景に盡（つ）きていると謂われている．雨に，晴れに，月に，その趣つきないのは，実にこの橋上の景である．駅より神橋まで電車賃七銭，橋を渡りて左へ長坂を登れば，右に輪王寺あり，正面は即東照宮である．寺は即ち古の日光門跡で，日光山諸仏道場を総括し，結構壮麗人目を驚かすものがあったが，回禄の災いによりて舊観（旧観・きゅうかん）を損じた．・・・*」（下線部は，神橋に関する記述部分（筆者記入））

このように観光対象の大まかな概要を示しながら説明しており，従来からみられた外国人による旅行記のような記述になっていることがわかる．一方，文献[26]では，40 頁を割り当てながら，表 8 のような項目立てを行いながら説明をしている．

表 8　日光における説明項目（英語ガイドブック[26]）

①交通および宿泊 Tokyo to Nikko，Yokohama to Nikko，The Nikko Line	③History of the Nikko Mausoleum	⑦Places of Minor Interest
	④The Four Seasons in Nikko	⑧Nikko to Chuzenji
②Itinerary Plans. A. Plan for 3 days' Visit, B. Plan for a week's Visit	⑤Information for Visitors to the Shrines and Temples	⑨Nikko to Ashio
	⑥Festivals of Nikko	⑩Highway to Yumoto

「③日光霊廟の歴史」では，徳川家康や建設費用，造営に関わった職人，建築物の種類，造営に費やした資材・労働者，修理など日光の社寺に関連した事項の説明になっている．この中で最も記述量の多い部分が，「⑤社寺の説明」であり，例えば神橋に

ⓒ2009 Information Processing Society of Japan

関する記述は以下のようである．

「*Mihashi, or the 'Sacred Bridge' is the first sight that prepares the visitor for the series of wonderful revelations both of nature and art that awaits his inspection in Nikko. From the station the slightly ascending street brings one, in about a mile, to the bridge called Nikko-bashi that spans the roaring torrent of Daiya. Parallel to the bridge is a red-painted bridge closed at both approaches. This is Mihashi, or Shin-kyo, meaning 'Sacred Bridge'. The clear blue of the water and the color of the bridge make a fine contrast. Legend says that the position of the sacred bridge marks the site where the saint Shodo-Shonin crossed the torrent on the back of two huge serpents, one red and the other green, which the deity of Shinsha-daio, in compliance with the fervent prayer of the saint, sent to help him across to the opposite bank. The bridge is 83 ft. long and 22 ft. wide and was built in 1636. It was destroyed by flood in 1902 and rebuilt in 1907. Both the railings and planks are painted red, and the former have ten posts with gilded metal ornaments. The stone pillars are fixed into the rocks that lie on the opposite banks. Formerly the bridge was used for the passage of the Shogun and the Imperial messenger only, and even to-day it is closed on ordinary occasions. The sunset as viewed from this place is regarded by some as one of the best sights in Nikko.*」

日本人向けの内容と比較すると，橋の伝説や構造に関する説明がなされ，より詳細な記述となっていることがわかる．

4. まとめ

明治から現代まで主要な情報媒体として利用された外国人向け観光ガイドブックを取り上げ，①観光ガイドブックの内容・構成，②明治初期の英語ガイドブックの記述内容，③同一著者による日本語・英語ガイドブックのコンテンツ比較，以上の 3 点の分析を行った．

その結果，①では観光対象の文化に対する認知度の違いや 19 世紀から 21 世紀の時代の変遷に伴う社会変化の影響が確認され，②では明治中期から大正初期にかけた日本の国際観光地の交通環境の発展や地域特性による記述内容の変化が確認された．さらに，③では英語版の観光対象に対する詳細な記述は外国人執筆の記述との共通性を示し，日本語版では鉄道利用者の利便性に関わる記述を主眼としているといった対象読者による執筆方針の差異が確認され，外国人のための観光ドキュメントの特徴が抽出された．

参考文献

1) 鈴木忠義編：現代観光論，有斐閣双書，pp.4-5（1977）
2) 日本観光協会：観光の実態と志向（平成 19 年度）
3) 法務省報道発表資料：平成 20 年における外国人入国者数及び日本人出国者数について（速報）(平成 21 年 1 月）
4) 国土交通省総合政策局観光経済課：平成 18 年度旅行・観光産業の経済効果に関する調査研究（平成 19 年 12 月）
5) 経済産業省：近代化産業遺産群 33，p.21（平成 19 年）
6) 内閣府大臣官房政府広報室：自由時間と観光に関する世論調査（平成 15 年 8 月）
7) 岡本直久, 毛利雄一, 中川浩志:休日余暇交通を考慮した将来 OD 推計のための基礎的研究，土木計画学研究・講演集，vol.35（CD-ROM，2007）
8) 里居真一，羽生冬佳，十代田朗，津々見崇：明治中期に刊行された外国人向け英文観光ガイドブックの記述内容の特徴，日本造園学会全国大会研究発表論文集(21)，pp.389-392（2003）
9) 今野理文, 十代田朗, 羽生冬佳:観光ガイドブックにみる観光地のアピールポイントの変遷，観光研究 14(1)，pp.9-16（2002）
10) 古屋秀樹，齋藤とも子：土産話の構造分析，日本観光研究学会全国大会研究発表論文集，pp.405-408（2008）
11) 吉井侑子：マルチエージェントシミュレーションによる観光情報伝播の研究，東洋大学国際観光学科卒業論文（2009）
12) A Handbook for travellers in Central and Northern Japan, Second edition, John Murray, by Earnest Mason Satow, Albert George Sidney Hawes(1884)
13) Japan (Eyewitness Travel Guides) , DK Publishing(2007)
14) JTB：ワールドガイドブック・フランス（2002）
15) 丸山宏：近代ツーリズムの黎明－「内地旅行」をめぐってー，十九世紀日本の情報と社会変動（吉田光邦編，京都大学人文科学研究所），pp.89-112（1985）
16) 勝又宏幸，安島博幸：戦前の御殿場における高原リゾ-トの成立と展開，1990 年度日本都市計画学会学術研究論文集，pp.319-324（1990）
17) 十代田朗，篠崎浩佳：中禅寺湖畔における大使館別荘の立地と利用に関する一考察-英国公使アーネスト・サトウを中心として-，日本観光研究学会機関誌，Vol.14，No.2，pp.1-6（2003）
18) 野瀬元子：日光，箱根を対象とした観光地形成過程についての考察－観光資源，交通環境と初期段階の外国人利用の差違に着目してー，東洋大学大学院紀要第 45 集，pp.31-56（2008）
19) 伊藤教子，初田亨：日光・中禅寺湖畔における外国人別荘地の形成，日本建築学会計画系論文集，No.558，pp. 271-277（2002）
20) 箱根温泉旅館協同組合編：箱根温泉史 ：七湯から十九湯へ（1986）
21) 前掲 12
22) A Handbook for Travellers in Japan, Ninth edition, John Murray, by Basil Hall Chamberlain, W.B. Mason(1913)
23) 白幡洋三郎：異人と外客－外客誘致団体「喜賓会」の活動についてー，十九世紀日本の情報と社会変動（吉田光邦編，京都大学人文科学研究所），pp.113-137（1985）
24) 中村宏：戦前における国際観光（外客誘致）政策－喜賓会，ジャパン・ツーリスト・ビューロー，国際観光局設置－，神戸学院法学第 36 巻第 2 号，pp.107-133（2006）
25) 鉄道院：鉄道旅行案内（大正 3 年）
26) The Imperial Japanese Government Railways: AN OFFICIAL GUIDE TO EASTERN ASIA, Vol.2(SOUTH-WESTERN JAPAN) and Vol.3(NORTH-EASTERN JAPAN)(1914)

ⓒ2009 Information Processing Society of Japan